

### 「誰もいない町」

牧師 横山順一

誰もいない町に行つたこと、ありますか？二月末、FNHの仲間と、福島へ研修に行つて来ました。五名の牧師と一名の神学生です。

「フクシマ・神戸子どもプログラム」として、被災地の親子を保養のために夏に招くようになって三年が経ちました。

ここいらで、招く側ばかりでなく、現地を訪れて現状を学ぼうという声が出て、一も二もなく実行の運びとなったのです。

残念ながら時間が取れず、普段のメンバー全員ということにはなりませんでしたが・・・。

受け入れて下さったのは、若松栄町教会の片岡謁也・輝美牧師夫妻です。

初日、朝四時起き、伊丹七時半の飛行機で仙台着。前日から待機して下さっていた片岡牧師と合流。空港近くでレンタカーを借り、即出発、開通したばかりの国道六号を使って、まずは南相馬市小高地区にある小高伝道所を訪れました。福島第一原発から十八キロの距離になります。

現在は無牧で、仙台東一番丁教

会の保科隆牧師が代務をなさっています。町のメインストリートにある、幼稚園を持った小さな教会でした。昼間は許可証があれば自由に入ることができますが、夜は禁止なので、誰も住んでいません。

国も県も、経済最優先で一刻も早く帰宅させたい一心、教会の近くで家や店舗を修復している業者をわずかに二社見ました。

でも、それだけです。シンと静まり返った町、人はいないのです。教会の斜め向かいの商店の「くまさか」という看板の、「く」の文字が崩れ落ちていて「まさか」になっていたのは、笑えないジョークでした。

それから浜に走り、漁船が何隻も打ち上げられた津波の跡に立ちました。これからも片付けられることは恐らくない場所でした。

そして原発から十三キロ、最も原発に近い「浪江伝道所」へ。浪江町は相当高い線量なので、予め百円ショップで買ったレインコート・ズボン、シューズカバーにマスクをして降り立ちました（これは一度限りの使い捨てです）。

かつては「バラ教会」と自称された美しい庭のあった教会でした。今は雑草が生い茂り、窓から何と

か薄暗い礼拝堂を覗くことしかできませんでした。

更に車を移動、街の入り口に「原子力・明るい未来のエネルギ」のアーチ看板がかかる有名な双葉町へ。ここも同じく帰還困難区域です。人気のない街中、信号機だけが点滅を繰り返している奇妙で哀しい空間でした。

極め付け、原発まで二・七キロ、限界のゲートまで近づきました。建屋のクレーンがすぐそこに見える、その先へは関係者でないと入ることが出来ません。

「ただ見て来た」だけなのに、みんな妙に疲れました。会津に向かう途中の山中（川俣町）で、とてもなく大規模な汚染物の仮処分場も見ました。あくまでも（仮）ですが、どう見ても「永久」にそこに置くとしか思えませんでした。

山道に突然現れたその巨大な処分場は、まるで沖縄で見た米軍基地と雰囲気がつくりでした。

研修のメインは六名の現地の方々からの報告と証言にあったのですが、それはまたの機会に。目に見えない放射能の怖さを、人がいない町々を巡って、つくづく思い知らされた一同でした。